

---

# 間宮くんと災難日記 番外編

なお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

間宮くんと災難日記 番外編

### 【Nコード】

N 8 1 3 4 D

### 【作者名】

なお

### 【あらすじ】

自称、世界最強の男、間宮健児と、自他ともに認める、地味野郎こと足利時宗と、自称、世界一の美貌を持つ男、花木涼。この話は、本編では、描かれない、彼らの日常をテーマに書かれた話である！足利くんは主人公である。そして、これは完全なるコメディである。

## 第1話：間宮くんの休日（前書き）

間宮くんと災難日記をいつも読んで頂いて、ありがとうございます。  
この連載は、本編とは違う、番外編になっています。

まあ、読んでやって下さい（、、）

第一弾は、間宮くんの休日です。

それでは、どうぞ！！

## 第1話：間宮くんの休日

俺の名前は、間宮健児。

（自称）世界最強を誇る間宮健児。

誕生日は、6月15日の双子座。

ジャインと同じだ。

血液型は、知らないがパシリがしきりに『間宮くんは、B型だよ！絶対、B！！賭けてもいいよ！間宮くんは、絶対、B！！』と言っていたので、なんかムカついて殴ってやった。

B！B！ってB型と俺に失礼だろうが！！

大体、俺が何型だろうが、てめえには関係ねえーだろうが！！

ああ…なんかムカついてきた…

今、すつげえ誰か殴りてえ！！俺の、ムーンサルトを食らわせて殺りてえ！（字が違うよ；『殺りたい』じゃなくて『やりたい』だよ；by足利）

と、言う事で俺の休日（平日でも一緒だよ！by足利）は、誰かに喧嘩（理不尽な暴力）を売る事から始まる。

さて、今日は誰が餌食になるかな？クツクツクツ…

俺の名前は、花木涼。有名私立浦沢学園の2年だ。

容姿端麗・成績優秀・おまけに運動神経抜群と、三種の神器がそろった男だ。

神は二物を与えないというが、俺は、特別だ。

影では、俺の事を『THEナルシスト』とか呼んでいるらしいが…それは、芋共のひがみだと思っているので気にしない。  
俺は、ポジティブだからな。

今でも、こうして俺が歩いているだけで、みんなが振りかえる。

「ふっ…美しさは罪だな。」

く街の人の声く

「おい！見てみるよ！あいつのかっこう！！」

「やだ！なにあれ？なんで、カボチャパンツに白タイツ？キモい！」

「あいつって、坊ちゃん校の『THEナルシスト』だろ？」

「なんか、見てるこっちが恥ずかしいよな。」

く街の人の声終わりく

（フツ、みんなが注目してるよ！！この俺に！！なんて、いい気分なんだ！！）

＼間宮side＼

「暇だから、街に来てみたのはいいが…殴りがいのある奴がいねえな？」

しゃーねえ、パシリの家にも押しかけてやるか！！

「…ん？なんだ？ありや？なんちゅーかつこうしてんだ？」

（カボチャパンツに白タイツ？キモい野郎だな…しかも、なんかこっちに来てないか？

あきらかに俺に向かつて来てるよな？…それに、すげえガン飛ばしてるし……あれ？なんかム力ついてきた。今、無性に殴りてえ…

「君が、バカ宮って言うの？！僕の美しさの邪魔もー

「ってことで、死ねー！！」

ドカツ！！

（ - （ ・ 、 ） 綺麗な、アッパーが決まったぜ！！）

「ああゝすつきりした！！パシリン家に行こうつと。」

＼花木side＼

僕より、注目を浴びる人間なんて…

＼街の人の声＼

「おい、見るよ？バカ宮だぜ！！」

「ホントだ！！史上最凶最悪の男『バカ宮』だぜ！逃げようぜ！」  
「あいつに関わると、ろくな事にならねえよ！」

へ（＊－－）ノ

く街の人の声終わりく

ちよつ、なんでみんな逃げて行くの！  
つてか…この美しさは100倍の俺を差し置いて、注目される『バカ宮』つて…許せない！！

この俺より、目立つ事なんて言語道断！！図々しいにも程があるわ  
！！

ちよつと、文句言つてやる！！

「君が、バカ宮つて言うの？！僕の美しさの邪魔もー  
「つてことで、死ねー！！」

ドカツ！！

（な、なんで…）

「ああゝすつきりした！！パシリン家に行こうつと。」

（バ…カ宮…め）

『かわいそうに…自ら災難に飛んで行くとは。』街の誰もが、そう  
思っただろう…と、同時にこいつも、宇宙一のバカだと思われる

花木涼でした。

「絶対に…復讐し…てや…る」

俺は、薄れ行く意識の中で、そう誓った。

今日も、また一人哀れな犠牲者が誕生した。

くオマケく

足利くん宅にて

「…でよ、ム力つくから殴ってやったんだよ！しかし、マジでキモい野郎だったぜ！」

（なにやってんだよ…休みの日まで…ってか、なんで休みの日まで俺は間宮くんと一緒にいるんだろ…）

「おい！聞いてんのか？！」

「はいはい…聞いて

「『はい』は、一回ー！！」

ボコッ！！

「ほげーっ！！」

しかし、一番の犠牲者は、やっぱりこの男『足利時宗』だろう。休日にも関わらず、押しかけられ、殴られて…本当にツイてないと



思う。

「あ、今日<sup>も</sup>晩飯食べて帰るからな。もちろん有無は言わせない。」

（もう、やだー！！）

月×日 晴れ（でも、心の中はいつも嵐）

俺は、今、一番デスノートが欲しいです。  
誰か下さい。

終わり

## 第1話：間宮くんの休日（後書き）

いかがでしたか？次は、足利くんの日記話になります！  
そっちも読んでね

それでは（、、）

## 第2話・足利くんの日記（前書き）

番外編、第2弾になります

今回は、足利くんの日記をテーマに書いています！

それでは、どうぞ

## 第2話：足利くんの日記

月 日 雨 （心の中は土砂降り）

今日、間宮くんと釣りに行った。

外は、雨だと言うのに、言い出したら聞かない『バカ宮』は、行きたくもない俺を、無理やり引きずって、近くの釣り堀に連れていった。

釣り堀の主人の制止も聞かずに、（まあ…正確に言うと、脅して無理やり入ったんだけど）釣りを始めた。

一匹も釣れなくて、キレた間宮くんに、釣り堀の中にダイブさせられた…冬の水は酷く冷たく危うく、死のダイブになるとこだった。

そして、家に帰った俺は、今、40 の熱と戦っている。

誰か、悪魔を倒す方法を教えて下さい。

今日の間宮くんの一言

『てめえが餌になつて魚を引きつける！！』

月 日 雪（心の中は吹雪）

今日、朝から猛烈に雪が降っていた。寒くて寒くて、みんな死にそうだったのに、なぜか間宮くんは、半袖短パンだった。

「見てるこっちが寒いわ！」とツツコミたくなつたが、めんどくさ

かったので無視した。

その後、

「男なら雪合戦だ！！」とクラスの男子全員を集めて『死という恐怖』の雪合戦を始めた。

間宮くんが投げる、雪玉はメジャーリーガー球のスピードで、みんな逃げるので必死だった。結局、間宮くんだけが楽しそうで、後のみんなは、死にそうだった。

明日は、学級閉鎖かな…

今日の間宮くんの一言

『てめえら、死ぬ準備は出来たんだろうな？』

奴は、悪魔のように笑っていた。

×月 日 晴 （心の中は、雷時々やっぱり雷）

今日、衝撃的な事実がわかった。

奴の誕生日は、ジャインと同じだと言う事だ！！

やっぱり、奴は、彼と繋がっていた。

それから、奴が血液型を知らないと言うので、『間宮くんはB型だと思っ』と言ったら、うるさいと殴られた。まったく理不尽な奴だ！！

けど、俺は絶対B型だと思う！！

そして、奴の血の色は緑色だと思う！！

今日の間宮くんの一言

『お前のモノは俺のモノ。俺のモノは俺のモノ。』

月×日 雨（心の中は嵐）

誰かデスノート下さい。

奴の名前を100回書きます。

今日の間宮くんの一言

『血祭りにあげてやるわ!』

月×日 曇り（心も目も霞んで見えない）

間宮死ね！バカ宮！！

いつも、俺ばかり殴りやがって！！

なにが、ペちゃんだよ？いい歳して恥ずかしくないのか？！

ばーか！！脳なし！！ハゲ！！

今日の間宮くんの一言

「ペコちゃんキャンディー買ってこい！3秒で」

無理に決まってんだろ！！

くオマケく

「ん？なんだこのノート？『災難日記』？」

「ああー！！それは、ダメ！見ないで間宮くん！！」

「ばか！見ないでと言われると見たくなるのが、人のさ……」

……………

「ま、間宮様……？」

「てめえ、よつぽど死にたいらしいな？」

ボキボキ……

「お、怒っちゃい『望み通り消してやる！！』やだ……」

ボキッ！バキッ！ボコッ！！

間宮くんが、そう言った瞬間に、俺は、薄れ行く意識の中で、今日の一言はこれだと思った。

終わり

## 第2話・足利くんの日記（後書き）

ここまで、読んで頂いて、ありがとうございました。

今回は、自称世界一の美貌を持つ男、花木涼の話になります

それでは、また～



### 第3話：花木家の一族（前書き）

番外編の第三弾です！

花木家の一族。花木くんの家族紹介になっています。

またしても、足利くんが犠牲になってますんで、読んでみてね

### 第3話：花木家の一族

やあ

世界一美しい美貌を持つ花木涼だよ

今回の番外編は、俺の話らしいね。

だから、今日は君達に俺の家族を紹介するよ。  
みんな、負けず劣らずの美貌の持ち主だよ？

まあ、でも俺が一番だけだね。

ここで、簡単に説明しておく、父が有名な資産家で、母がアメリカの大富豪の令嬢なんだよ。

若い頃は、二人とも美しいと持てはやされたらしいよ？

まあ、年寄りの戯言だから信憑性は薄いと思うけど

で、下に妹：が一人いてね、そいつが、変わってんの。

結構、俺も変わり者だけど、アイツには負けるね。

まあ、取りあえずこんな家族だけど、覗いててよ？

ってか、覗かないと：クスッ：どうなることやら。

帰りの夜道は気をつけなよ？

おっと、いけないもう一人の俺が：それじゃあ、始まり

「で、なんで俺が花木くんちに呼ばれてるの？」

「なんでって、ツッコミ役だよ？」

「それだけ?!それだの為に、朝、気持ち良く寝ていた俺を拉致してきたの?!」

〈回想〉

誰にも邪魔されない、日曜の朝。もう少しだけ眠…

バリーン!!

「@#%¢?!」

「足利時宗、確保!!」

「ぎゃあ!!ごめんなさい!!なんか、分かんないけど謝るから命だけは!!」

「今から、連行します!!」

「なんで?!ってか何処に?!誰か、ヘルプミー!!」

〈回想終わり〉

「君寝てたの?通りで、変な格好してるなって思ったよ?ってか、そんな服何処に売ってるの?」

(そのままの言葉を、お前に返してやるよ!!)

花木くんは、貴族の格好をしています。

「ってか、俺の部屋の窓ガラスちゃんと、弁償してよね?!」

「分かってるよ…君ってセコいんだね？そんなんじゃ、モテないよ？」

（ほっとけ！！）

「で、誰から紹介すんの？早くしてよ？俺、もう帰りたい。今すぐ帰りたい。」

「そう…なら、帰してあげるよ？土に。」

「すみマセンでした！！もう、帰りたいなんていいません！！」

「分かればいいよ。じゃあ、行こうか？まずは、父を紹介するよ。」

コンコン！

「お父様！涼です。」

「入りなさい。」

「失礼します。」

ガチャ…

「珍しいな、お前が私の部屋に来るとは？何の用だ？」

「今日は、お父様を紹介しに来たんだよ。彼に」

「は、初めまして…足利時宗といます。」

「やあ！君があのだ利くんか！！いつも、執事から聞いてるよ！！  
涼と仲良くしてくれていると。」

「いえ、そんな！こつちこそいつも、花木くんには、お世話になってます。」

「本当にね。」

「……………」

「すまないね…今まで好き勝手に育ってきたから我が儘で…君も大変だろ？」

「ええ、まったく。」

「あ、見て？地味男君！あそこの土  
全然、大変じゃありません！！」

「フフツ…そうか、これからも涼をお願いします。」

「あ、はい！こちらこそ」

（全然、いい人じゃん！本当に花木くんのお父さん？！なんか、常識人過ぎて、ビックリしたよ）

「あ、そうだ！君にお土産をあげよう！」

「え、いや…そんな気にしないで下さい！！」

（やった！なんか高価なものくれるかな  
（ ））

「これを…君ならサイズもピッタリだな。」

（つて、貴族の服じゃん！！いらねー！！）

「見たところ、君は変わった服装をしているから、これを来なさい。貴婦人にモテるぞ？」

（やっぱり、この二人親子だ！！めっちゃ、そっくりだ！！くりそつだ！！つてか、貴婦人なんて、この日本にいるかよ！！ここは、中世かよ！！）

「さ、着替えたまえ！」

「えっ…」

「なんだい？嫌なのかい？気に入らないのかい？この私が選んだ服が？」

「お父様は、自分の思い通りにならなかったら、暴走する癖があるから気をつけてね？」

「ええ！！早く言つてよ！！」

「オジサン…シヨックだな？せつかく君に似合つと思つたのに…燃やしちやおつかな…この服つてか、すべてを」

（目がマジだ！！やばいよ！燃やされたらシャレになんない！！）  
「着ます！喜んで着ます！！ずっと、着ておきます！！」

「おお！そうか、そんなに気に入ってくれたか！嬉しいよ！」

「イエ、ドウイタシマシテ…」

「じゃあ、あっちで着替えておいで？じい！！」

「なんでしよう？坊ちゃま」

「彼の着替えを手伝ってあげて。」

「かしこまりました。」

「どうかな？」

「似合わないね。」

「こら！涼！本当の事を言うんじゃない！！…いや、やっぱり君には、さっきの服が似合うかな？」

（お父さん、フォローになってないから！）

「やっぱり、着替え直します。」

「あ、さっきの服捨てたよ？」

「え？なんで！！」

「君が、ずっと着とくって言ったから、もついたらないかなあと思つて。」

「いや、あれは言葉のあやで！！」

「それに、あんな汚いのこの家には相応しくないからね」

「汚くねえよ！ちゃんと、毎日洗ってるっての！！」

「もう、いいじゃない済んだ事は……」

「帰りの服は？！」

「それ着て帰りなよ」

「こんなもん着て帰ったら、家族やご近所から白い目で見られるわ！！」

「うるさいな……ホント君って細かいね？それとも、二度と家に帰れないように、してあげようか？」

「足利くん！涼は本気だよ！！」

「いや、だったら止めるよ！あんたの息子だろ？！」

「ハハッ！涼は、私の言うことは聞かないんだよ！」

（ガッデム！！）



「で、どうすんの？着るの？死ぬの？」

「着ます！着て帰ります！！白い目とか気にしません！スイマセンでした！！」

「そ じゃあ、次行くよ。」

（なんか…すごく疲れる…）

「また、遊びにおいで！足利くん！！」

「次は、お母様に会わせるよ。」

「…はい」

（もう、別にどうでもいいよ…）

「お母様！会わせたい人がいるんですけど。」

「誰？珍しいわね、涼ちゃんがお客様連れて来るなんて？初めてじゃない？」

「俺の友人で足利時宗くんです。こっちが、俺の母でジェニファーだよ。」

「ど、どうも！」

（わぁ…すごい綺麗な人！お母さんって、外国人なんだ！！そういえば、花木くんて髪の色金髪だもんね…）

「…へえ、ずいぶん地味な子ね？涼ちゃんの友達って言うから、結構綺麗な子なのかと思っちゃったわ」

「ごめんね、母は正直者だから。」

「…そうみたいだね。」

「あ、それより涼ちゃん！聞いたわよ！！」

「何をだい？」

「アメリカの息子とやり合ったらしいわね！！」

「ああ…望ね。うん。目にモノを見せてやったよ！！」

（望？…東端先生の事だよね？やっぱり親戚同士だから何かマズい事でもあったのかな？！）

「よくやったわ！！」

「えっ？」

「あの、ドブスのアメリカの息子、あたし気に入らなかったのよ、なんか、あの女に似て嫌味な子だったものね。顔だって、あの女にそっくりでブスだし。」

「望は、母の姉の子なんだよ。姉妹だけどすごく仲が悪くてね。」

「へ、へえ…」

「涼ちゃん、姉妹なんてよしてよ！あんな女。姉なんて思った事ないわ！！あたしよりも、ブスなくせしていつつも、偉そうに言うのが気に食わないのよ！！」何が、世界一美しいよ『あたしが世界一だつての！！』」

「いや、俺だけどね。」

（ナルシストと性格悪さの根源は母親だったのか…）

「あ、ごめんなさいね。今から、エステの予約してるから、また今度ゆっくり遊びにいらっしやいね。」

「はい。」

（もう、来たくないけどね）

「それじゃあね。涼ちゃん」

「お母様、アイツどこにいる？」

「アイツ？ああ…多分中庭じゃないかしら？何でも素敵な殿方を見つけたらしいわよ。その方に中庭の薔薇を渡すとか言ってたから。」

「そ、ありがとう。それじゃ、次行くよ。」

「え、あ！待ってよ！！失礼しました！！」

バタバタ…

「あんなに、楽しそうな顔してる涼ちゃん初めて見たわ。」

「お兄様!！」

(わぁゝすごく可愛い!！)

「私をお探しになっていらしたんでしょう?」

「何で知ってるのさ」

「さつき、お母様にお会いしましたから。こちらが、お兄様のご友人?」

「ああ、紹介するよ」

「初めまして、足利時宗です。」

「初めまして、いつも兄がお世話になっております。妹の優と申します。」

「花木くん、綺麗な妹さんだね。」

「まあ、綺麗だなんて…ありがとうございます。足利さんも、とても素敵です。」

「いや…そんな

ぐ(、、\*・)(ゝ”」

（素敵だなんて、初めて言われたよ…  
なんて、素直な子なんだ！！とても、花木くんと兄妹とは思えない  
よ。）

「なんだか、私…好きになりそうですわ（mm\*）誰か、お付き合  
いしてらっしゃる方とか、いらっしゃいますか？」

「え！いや、そんなの全然いません！！」

「もし、よかつたら…お友達になっただけませんか？」

「あ、はい！！」

（やった！！ついに俺にも春が！！）

「本当ですか？すごく嬉しい！！」

「へえ…お前って地味な奴がタイプなんだ」

（グサツ！！）

「お兄様！なんてことおっしゃりますの！！時宗さんに、失礼でし  
よ！！謝って（、o、）」

「い、いやホントの事だし…」

「いいえ、全然そんなことございません。私には、お兄様より、か  
つこよく見えます…」

「優さん…」

「時宗さん」

「ねえ？俺を無視しないでよ。」

「う、ごめん！..」

「それより、あんまり、優を付け上がらせない方がいいよ？..どんなつても知らないよ。」

「え？..どついう意味？」

「そいつ、そんな格好してるけど、男だよ？」

.....

「..またまた！花木くん冗談キツいよ！..どつ見たつて女の子じゃん！..」

「触つて確かめてみたら？..そしたら、分かるよ」

「.....ホントに？」

「ホントだよ。」

「.....ホントのホントに？」

「しつこいなあ。」

「私が男って、知らなかったのね。てっきりお兄様が最初に教えてらっしゃるのかと思ってたわ。」

（” 〇 ”）

（男って…）

男ってなんだよ！！紛らわしい格好しやがって！チクショー！！俺のときめき返せ！！）

「相当ショックみたいだね。」

「でも、大丈夫！！性別なんて、私たちには関係ないわ！！」

「関係あるわ！！男なんてごめんだよ！！俺は、小さくて可愛い女の子と付き合いたいんだ！！」

「…なによ女がいつて…その気にさせといて今更」

「いや、だから、それは、知らなかったからであって  
「そんなこと関係あるかよ？」

「えっ？」

「てめえ、俺が男だって聞いた途端手のひら返しやがって…ナメてるのか？！ああ”？！  
オカマをナメつと痛い目合わすぞ？コラア？！」

「なんか、さつきと全然違うー！！男になってる？！」

「はん、こんな地味男こつちから願い下げだよ！てめえなんか、キープだよ！キープ？調子にのんなよ？チビ助！！」

「しかも、言いたい放題」

「キレたら、男に戻るんだよ。」

「二度と、うちの敷居跨ぐんじゃねえーぞ？分かったな？…殺すぞ？」

「ちょー怖えええ！！」

「もう、その辺で戻りなよ。それ以上の無礼は許さないよ？こんな地味男でも俺の友人だからね。」

「…ごめんなさい！お兄様！！」

（すごい！花木くんの一言で元に戻った！！）

「もう、用も済んだし向こうに行って花でも何でも摘んできなよ。」

「はい…」

それじゃあ、ごきげんよう。足利さん

（\* ^ ^ \*）

「さ、さようなら…」（目が笑ってなかった）



「じゃあ、家族の紹介終わったから、君もう帰っていいよ。」

「はっ？」

「だから、もう君には用がないから帰っていいよ。」

（なんだよ！！それ！？）

「俺、今からエステに行かなきゃいけないし。じいに車出させるから、それに乗って帰んなよ。じゃあね。」

「じゃあね　って…」（ホント自己チューだな、へ、）ってか、結局何しに来たのか分かんないよ！！）

「足利様、どうぞお乗り下さい」

「あ、はい」

「坊ちゃんのご無礼私から謝ります。スイマセン。」

「そんな！執事さんが謝る事ないですから！！」

「何分あの性格のせいで、今まで友達が出来た事なかったので、嬉しかったんでしょう。」

「え？」

「足利様という素晴らしい御友達を、旦那様方に、ただ純粹に紹介したかっただけなんだと思います。けれど、接し方が分からずあのような態度を取られてしまって…」

「そう…なんですか」

「これから、坊ちゃんをよろしく願います。」

「はい。」

執事さんの話を聞いている内に、さっきまで怒っていた自分が、バカらしくなってきた。

花木くんは、花木くんなりに一生懸命、俺に接しているのかもしれない…

今まで一人だったからどうしていいか分からずに、ただ、思うままに行動しているんだろう。…まあ、いいか！かなり変わった友人だけど…

だけど、素直に嬉しかったから。花木くんの気持ちも、腹を立てる事ばかりだけど、寛大な心で接して行くよ。

「足利様、ご自宅に着きました。」

「あ、ありがとうございます。」

「いいえ、こちらこそ。あんなに楽しそうな顔をしてる、坊ちゃんを見るのは初めてでした。また、いらして下さいね。」

「はい。」

「それでは。」

（いい人だったな…執事さん。あんなに大事に思ってくれる人がいて羨ましいよ。）

ヒソヒソ…

「ん？」

「いやだ…見て、あの格好！」

「何あれ？なんであんな格好してんの？」

「足利さんとこの子でしょ？」

（はっ（　　一一一）

ヤバイ忘れてた！！

俺、貴族の格好のまんまだっただんだ！！（

コソコソ…

（は、恥ずかしい！！穴があつたら入りたい！！）

「時宗！」

「母さん！！！」

「あんた…何なのその格好？！ってか、どこ行ってたの？！頭大丈夫

夫?!」

「いや…これには、事情があつて…」

「とにかく、中入つてよ!」ご近所に白い目で見られてるじゃない!」

「…はい」

ガチャン…

「で?なにがどうなつたら、その格好に辿り着くの?」

「友達の家に遊びに行つて来たんだよ。この服は、友達のお父さんがくれた。」

「へえ…そう!つて、そんな言い訳が通ると思つてんの!!ホントの事言いなさい!!」

「ホントだつて!!」

「いい?時宗。ここは、日本よ?ここは、中世のヨーロッパじゃないの!分かる?」

「分かるけど、ホントの事なんだから、仕方ないじゃん!!」

「そう…もう、いいわ。母さん怒つた。あんだ、今日ご飯抜き!!母さんに恥かかせた罰!!」

「そんなぁ(泣)」

なんで、いつもこんな目にばかり合うのでしょうか？  
俺が、いったい何をしたと言うのですか？？

スイマセン、執事さん。やっぱり、普通の友達がいいです。変わった友達なんていりません。

誰か、俺に普通の友達下さい。

誰か、俺に救いの手をさしだして下さい。

そして、平和なところへ連れてって下さい。

そう、思う今日この頃。

おまけ

「ああ！今日は楽しかったな！やっぱり、彼を連れてきて正解だった。最高の暇潰しだったな！！今度は、何して遊ぼうかな？」

執事が考えているのとは裏腹に、足利の事など、これっぽっちも考えていない、花木くんなのでした。

終わり

### 第3話：花木家の一族（後書き）

毎度ありがとうございます。

いかがでしたか？

花木家の一族。

タイトルは、お気付きの方がいらっしゃるかな？犬神家の一族から拝借しました（笑）

つてか、『こんな家族ありえねえーよ』をテーマに書いてみました。

次は、間宮くんのバイト編！強敵キャラ表れる！！の巻で行きますので！

それでは、また（、、）

## 第4話：間宮くんのバイト（前書き）

番外編小説の第四弾です

強敵キャラとは、一体誰なんでしょうか？！  
それでは、お楽しみ下さい。

## 第4話：間宮くんのバイト

こんにちは、僕の名前は富樫優一と言います。スマイルコンビニで働く、大学生です。

ここで働き始めて3年になります。

店長からも絶大な信頼を受けていて、もし、就職が決まらなかったら、社員にしているとされました。

正直、就職が決まりそうになかったの、その言葉を聞いて安心しました。

さて、今日も頑張るぞ！！

あ、そうそう！今日は新人さんが来るそうです。新人といっても、前のバイトもコンビニだったらしいので、一から教えるなくていいので、助かります。

僕、教えるの下手だからなあ……

どんな人が来るのかな？もう約束の時間なんだけどな？。

何か、あつたのかな？！

もしかして……事故に？！

わあー！じいじやい

今ごろ救急車の中だよヘルプミーって叫んでるよ！！

$$((\neg \vee) \vee)$$

富樫くんは、妄想癖があります

「おい！」

「ぎゃああ！」



「てめえ、俺が何回呼んだと思ってんだ？殺すぞ？」

「へ…殺す？もしかして、殺し屋ですか？！」

……………

「…てめえ以外に誰かいらないのか」

「あ、すいません（＾―＾；）今の時間帯は、すごく暇なんで僕だけです。後から店長が来ると思います。」

「チツ…俺がわざわざ出向いてやったのに、何してやがんだ？あのハゲが！」

「あの…失礼ですけど、あなたは？」

「今日から、ここで働いてやる、間宮だ。」

「あ！新人さんですか！初めまして、富樫優一と言います。よろしくお願いします。」

「ああ。」

「間宮さん、殺し屋じゃなかったんですね！よかった〜！実は言う  
と内心ドキドキだったんですよ（ノ）（ノ）」

「……………」

「どうしたんですか？」

「なんでもねえ」

「あ、ちよつと待ってて下さいね！今、制服持ってきて来ます！」

バタバタ…

「変な野郎だな？」

間宮くんか…めちゃくちゃ、かつこいい人だったな…  
ってか、最近の高校生はみんな、オシヤレだよな…  
僕も見習わなきゃ！

「あ、あつた！サイズは、Mで大丈夫かな？」

結構、身長高かったしな

『わぁ！助けて〜』

ん？なに！誰かが、叫んだよ！今！！

…もしかして、間宮くん！！……コンビニ強盗？！

た、大変だあ！どうしよう！

そつだ、まず様子を見に行かなきゃ！

ゆっくり、忍び足で…そつと…

「ああ」？てめえ、今は、ポテト売り切れつつってんだろうが？殺すぞ？」

「ヒィー！ごめんなさい！！」

「ま、間宮くん、何してるの？！」

「こいつが、ポテトポテトってうるさいから注意してたんだ」

「だ、だめだよ！君は店員！この人は、お客様！もっと、優しく注意しないと！」

（いや、客に注意とかないから！優しく注意とありえないから！）  
と客は心の中で叫んだ。

富樫くんは天然です

「うっせえ！俺に指図すんな！俺は俺のやり方があんだ！！殺すぞ？」

「もう！さつきから、『殺すぞ？』って、何回も言つて！それ口癖なの？！だめだよ！直さなきゃ！そんなんじゃ、ろくな大人に……」  
はっ！（・口・ノ）ノもしかして……間宮くんは、すさんだ家庭環境で育ったのかも……だから、平気であんな言葉が……きつと、お母さんの連れて来た男の人に苛められた過去を持つてるんだね……間宮くん、ごめんね！何も知らないで、怒ったりして！

富樫くんは妄想癖があります

あれから、間宮くんにチョコク・スリーパーをかけられて、失神し

しかけたポテトのお客様に、謝ってなんとか事なき終えました。

彼は、新人だし、家庭環境がさんだから（勝手に決め付けています）僕が、力になってあげなきゃね！

カラカラゝ

「いらっしやいませゝ」

「やあ 間宮、来てあげたよ…っっていないじゃない？」

わあ…すごい（・・・\*）  
王子様だ！初めて見たよ

花木くんは、王子様のかっこをしています

「ねえ？君！」

「は、はい！」

「ここに間宮って男バイトしてない？」

ま、間宮くん王子様と知り合いなんだ！！  
すごい！

「ちょっと、聞いてんの？」

「あ、すいません！王子様！間宮くんなら奥で休憩してます！今、呼んでくるんで、お待ち下さい」

バタバタ…

「…王子様だつて…？ちょっと、嬉しいじゃない」

「間宮くん！王子様が…って何してるの！？それ、店のおでんじゃない！」

「ああ」？腹減ってるから食べたんだよ？文句あんのかよ？」

「文句も何も…」  
はっ（・口・ノ）ノ

そうか…間宮くん家で、お母さんがご飯をしてくれないから、ご飯が食べれないんだね…だから、コンビニで働いて、ご飯を調達してるんだ！  
なんて、賢いんだ！

コンビニでそんなことを、してはいけません

「間宮くん！これも食べなよ！今日入ってきたお弁当だから、大丈夫だよ！」

「お！気が利くな！！今日から、お前も俺のパシリにしてやるよ！  
！なんか（喧嘩とか抗争）あつたら、いつでもぶっ飛ばしてやるよ！

「ありがとう？」

パシリ？…パシリってなんだろう？友達の新しい呼び名かなんかな？  
間宮くんっていい人だな…『なにかあつたら』なんて、家の事で大変なのに…

ほんとほ、年上の僕がしつかりしなきゃいけないのに！！

間宮 side

かつたりいな…

なんで、俺様が、便所そうじなんか、しなくちゃいけねんだよ？  
殺すぞ！！

ってか、なんだあのちび助は？

コンビ二って、中坊もやとってんだな。

なんか、不思議キャラでやりにくいぜ！

(。。。)、

富樫くんは、童顔で158cmなので、間宮くんは、中学生と勘違いしています

しかも、ちよつと上から目線つてのが気に食わねえな…絞めとくか？

「間宮くん！王子様が…って何してるの！？それ、店のおでんじゃない！」

「ああ」…？腹減ってるから食べたんだよ？文句あんのかよ？」

「文句も何も…」

チツ…うぜえな。やっぱり絞めるの決定だな！

誰が上かったのを、たっぷり教えてやるぜ！

「間宮くん！これも食べなよ！今日入ってきたお弁当だから、大丈夫だよ！」

なんだ？俺様の睨みにびびって弁当まで差し出してきやがったな。口ほどにもないな。絞めるほどでもないし、むしろパシリに出来そうだな。

「お！気が利くな！！今日から、お前も俺のパシリにしてやるよ！なんか（喧嘩とか抗争）あったら、いつでもぶっ飛ばしてやるよ！」

「ありがとう？」

パシリ2人目ゲット！！これから、うんと、こき使ってやるぜ！

間宮くんは悪魔の子です

「ちょっと！いつまで待たすのさ！！この俺を待たすなんて、いい度胸してるね！！」

「王子様！！ごめんなさい！間宮くん、王子様が、間宮くんを訪ねて来てくれたんだよ！」

「花木、てめえ何しに来たんだよ？つてか、なんちゅーかつこしてんだ？俺の前では、私服禁止だっただろうが？」

「うるさいな！仕方ないだろ！エステの帰りだったんだから。それにしても、わざわざ、この俺が寄ってあげたのに、なんだい？その態度？」

「ああ」？文句あんのかよ？」

た、大変だあ！

間宮くんと王子様が！！喧嘩してる！止めなきゃ！王子様に逆らったら、間宮くん死刑になっちゃうよ！！  
なんとか、阻止しないと！

富樫くんの中では、花木＞自分＞間宮の構図になっています。ざまあみろ！間宮！^m^

「あのーちよつといい？」

「「あ”？」「」

「店長！！」

「お客さん、ずっと待ってるんだけど？」

「あー！」

「それがどうした？ハゲ…てめえがレジしたら済む話だろうが？」

「ええ！！店長に何言っちゃってんの？君より偉いんだよ？！君クビにするよ？！」

「うるさいよ？店長だからってなんなのさ？偉そうに言つもんじゃないよ？店潰すよ？」

「な、なにこの王子！コンビニと一切関係ないのに、なんでこんな



偉そうなの?! つか、店潰さないで!!」

「だったら、おとなしくしておくことだね。」

「命が欲しかったらな」

「ちょー物騒じゃん! コンビニ強盗より、怖いよ!」

「て、店長! そんなことより、早くレジしないと! お客様が!」

「あ! そうだ! 早く行こう! 富樫くん、間宮くん…はいいよ、休憩してて下さい」

「当たり前だ! ハゲ」

「ほら、さっさと働きなよ」

「なんか、間違ってる…世の中、間違ってるよ!」

あれから、店長と僕で接客をこなして、なんとか混乱は避ける事が出来ました。

最初、文句を言っていたお客様も、間宮くんと王子様が出て来たら、何も言わなくなりました。

…なんでだろ?

まあ、いろいろと大変でしたが、けっこう楽しい一日になりました。間宮くんとも仲良くなれたし、王子様にも会えたし。

これから、スマイルコンビニに来るのが楽しみになります。

あ、そういえば、店長が泣いていました。  
間宮くんが入ってくれて、そんなに嬉しかったのかな？よかった…  
みんな、仲良くなれて。

富樫くんは天然です

これから、こんな感じで和気あいあいと働いて行きたいと思います。  
す。  
終わり。

おまけ

の担当をしていた、足利くんから、一言。

「この話の登場人物、みんなまともじゃないよね」

今度こそ、終わり

#### 第4話：間宮くんのバイト（後書き）

いつも、ありがとうございます。

いかがでしたか？初登場の天然妄想大学生の富樫優一くんは？  
実は、強敵キャラとは、彼の事でした。

ある意味強敵じゃないですか？！  
話、噛み合っていないし（笑）

まあ、次の作品は未定ですが、本編共々こちらも、よろしくお願  
いします（――＊）――＊）

## 第5話：一条さんと卒業式（前書き）

3月ということで、卒業をテーマに書いてみました。

一条くんとは、青嵐高校生徒会の会長の事です

まあ、読んで見て下さい（、、）

それでは、どうぞ

## 第5話：一条くんと卒業式

私の名前は、一条帝。ここ、青嵐高校の生徒会会長だ。

私は、今日の良き日にここを卒業する。

「それでは、卒業生答辞！卒業生代表、一条帝！」

「はい！」

今思えば、ここでの生活も悪くなかった。良き仲間に出会えて、楽しい思い出を作れて、尚且つ、生徒会会長という立派な職務にもつけたからだ。

…しかし…

一つだけ心残りがある！それは、世界一の問題児、間宮健児に勝てなかった事だ。

球技大会で、あの男に惨敗してからと言うもの、ますます態度がデカくなりやがって…

おっと、すまない。言葉が汚くなってしまった。  
とにかく、あの男だけは許せないと言う事だ！

まあ、卒業する今となってはもう、どうでもいいけどな。

「…これを答辞とする！卒業生代表、一条帝。」

今日の、この良き日にあの悪魔の事など考えたくもない。

もう、卒業したら奴の事を考えなくて済むから、せいせいする。  
もう、服装を注意してDDTをくらす事もなくなる。

「卒業生退場!!」

もう、あの馬鹿の事で頭を抱える事もなくなるのに…  
それが、妙にさみしいと感じるのは、私の生活の一部に、いつの間にか、あの馬鹿がなっていたということか…

「馬鹿々しい…」

「ん?どうした」

「いや、何も」

本当に、これで終わりなのだな。

「お疲れ様でした。一条会長」

「会長は、よしてくれ。もう、私は、会長じゃない。今は、君が会長だろ?五木」

「そうでしたね」

「なんで、五木なんだよ!俺の方が、会長っぽいつすよね?」

「そつ怒るなよ?四宮副会長」

「実力の差でしょう」

「ムカつく！ホントにムカつくな？お前は」

「一条先輩は、大学に行くんですよね？」

「ああ……」

「無視すんな！クソ五木」

「三上先輩と一緒にの大学ですか？」

「あいつは、大学行くの止めたよ。」

「何ですか？」

「アメリカに行くそうだ。役者になりたいらしい」

「へえ、でも先輩ならなれるっすよ！かつこいいし」

「二葉先輩は？」

「あいつは」

「俺は、ボクシングのプロ選手になる」

「二葉先輩！」

「俺も、いるよ」

「三上先輩！」

「なれるんすか？プロなんて、そう甘くはないっすよ？」

「うつせえ！プロレス馬鹿！てめえは、黙ってる！」

「なんなんすか！ボクシング馬鹿！！」

「あゝ？」

「やめろ！二人とも。今日ぐらい仲良く出来ないのか？」

「ほっとけばいいんですよ。馬鹿Mコンビは」

「だから、Mじゃねえって！！」

「仲がいいんだか、悪いんだか」

「ホントに可愛げがないよな？五木は」

「同感っす」

「僕にそんなもん、求めないで下さい。気持ち悪い」

「ム力つく！！」

「フッ……」



「どうしました？三上先輩」

「いや、さみしくなるなと思ってな…もう、こうして5人揃う事もないと思うとな」

「…みんな、バラバラになっちゃいますもんね」

「一条も俺も県外だし、ましてや、三上はアメリカだもんな…」

「今日で、別れか…」

「なに、みつともない顔してるんですか？大の男が4人も揃って…自分の夢の為に行くんでしょうが？だったら、もっと胸張って下さい。それでも、青嵐高校生徒会ですか？」

「五木…」

「そうだな。胸張って卒業しなきゃな」

「会えなくなつて、心はいつも、繋がっているっすよ！なあ五木！」

「そんな、気持ち悪い事は言ってますん」

「なんだよ！雰囲気ぶち壊しじゃねえか！」

「知りません、そんなこと」

「やっぱ、ム力つくわ！お前と間宮だけは！」

「…二葉」

「…ホントは分かった。あいつより、弱いって。けど、認めなくなっただけなんだ。プロレスみたいなのに、ボクシングが劣るってのを…」

「だから、俺はボクシング選手になって、世界チャンピオンになる！そして、あいつに分からせてやるんだ！ボクシングの偉大さをな！」

「頑張れよ」

「ああ！」

「一条先輩は、弁護士になるんすよね」

「そうなのか？」

「ああ、父と同じ道を歩みたいと思ってな」

「お前こそ、頑張れよ！弁護士って、難しいんだろ？」

「先輩が、世界チャンピオンになるより簡単っすよ」

「んだと、コラア？」

「三上先輩も、頑張ってください」

「お前もな、五木」

「い”だあい！二葉先輩、ギブ！」

「こら！やめんか！お前たち！」

「それじゃあ、最後に写真でも撮りますか」

「照れくさいな」

「いいじゃないっすか？先輩たちが、此処にいたっていう証に！」

「よし、撮るか！」

「それじゃあ、いくっすよ！」

パシヤ

「…じゃあ、帰るか」

「ああ…」

「じゃあな、五木！バカ四宮！」

「「今まで、本当にお世話になりました。立派な先輩方の教えを基に、これから生徒会を頑張っていきます！！ありがとうございましたー！！」」

……

「お前たち……」

「へへッ、五木とこれだけは、ちゃんと言おうなって決めてたんすよ！」

「なんかお礼とかないんですか？、僕、すごく恥ずかしかったんだから」

「「「ありがとう」「」」」

いつも、生意気だった後輩が、こんなに立派になっているなんて……

「それじゃあ、体に気をつけて。」

「また、いつでも遊びに来て下さい」

人というのは、成長するモノなのだ……

「二人とも、ちょっと待つてよ！！」

「早くしろ！パシリ！」

「ホントに君は、とろいね？」

「なんだよ！お前らがこんなに、荷物持たせるからだろ？！」

…変わらない奴もいるけどな

「間宮、お前と言う奴は相変わらず…」

「ん？なんだ、クソ会長じゃねえか？」

「よ！花木」

「何してるのさ君たち？」

「何って、今日は卒業式だっただろうが？」

「それが？」

「ちよつと！先輩たちは、今日卒業したんだよ」

「へえ〜おめでと」

「ケツ！どうでもいいわ、てめえらの事なんて」

「確かにね〜」

「ちよつと、先輩たちに失礼だろ！！」

「おい、行くぞ！早くしないと、ランボー特製Tシャツが売り切れ  
る！」

「そんなの買うのは君ぐらいだよ。それより、俺の服が先だよ！」

「てめえの服なんざてめえで買いに行け！」

「お前も、自分で買いに行け!!」

「…なんか、俺たち眼中にないらしいな」

「どこまでも、コケにしゃがって!クソ間宮!」

「やめろ!二葉…もう、奴と関わらなくて済むんだ。帰るぞ」

「じゃあな、花木!また、勝負してくれよな」

「気が向いたらね」

「じゃあな!クソ間宮!世界チャンピオンになって、てめえを見返してやるぜ」

「ふん、てめえが世界チャンピオンになれるんだったら、地球上の生物みんな世界チャンピオンだな。」

「¥(\*、・)ノあんだと!」

「では、失礼する」

「あ、はい!卒業おめでとつございました」

「…ありがとう」

「おい、三上!聞いたかよ?今の言葉!マジム力つく!」

「落ち着けよ」

「じゃあ、ここでお別れだな」

「ああ」

「アメリカで寂しくなったら、電話してこいよ」

「ありがとう、お前らもな」

「」「それじゃあ」「」

この先の事を思うと、私でも、正直不安だらけになる…  
だけど…

「まだ、何か用か？」

「別に…ただ一言言っというてやろつと思つてな」

「？」

「心配すんな、青嵐は俺が守つてやるよ（俺んだしな）  
だから、てめえは、てめえのやりたい事をやりやいいんだよ。（そ  
して、死ね）」

「…間宮」

「じゃあな！クソ会長」

「…じゃあな、クソ間宮…」

前言撤回。

人というのは、成長するモノだな。

こんなに、立派な後輩たちがいるんだ…今度は、私が成長する番だな。

私は、私の夢のために頑張ってみよう。

生意気な後輩たちに笑われないように。

私の名前は、一条帝。

私は、今日の良き日に、ここを卒業する。



## 第5話：一条くんと卒業式（後書き）

いかがでしたか？

ちよっと、間宮くんがいい人に見えたという、そのあなた！

それは、勘違いです！間宮は、そんな出来た人間じゃありません。てゆーか、人間じゃありません。悪魔です！

実は、青嵐を乗っ取る為に、会長を安心させるために、あんな口八丁を…という、裏エピソードがあっただんです（笑）  
すいません、伝わりにくくて…

何はともあれ、今度は、春休みの出来ごとでも書けたらいいなと思っ  
てます！

それでは、また（、、）

## 第6話：優ちゃんと運命の出会い（前書き）

久々の番外編更新！！

今回のお話は、花木くんの妹…じゃなかった、弟のお話です。

運命の出会い…さて、それは誰でしょうか？！

それでは、スタート！！

## 第6話：優ちゃんと運命の出会い

私の名前は花木優。

今年から、浦沢高校に通い始めたピカピカの1年生。

兄は、世界1のナルシストで有名な花木涼。

浦沢高校に通っていたのですが、気紛れで、あの凶暴で下品な高校、青嵐男子高校に転校いたしましたの。

お兄様以上の美貌を武器に、落とした男は数知れず…

でも、なぜかしら？

いつも後、一歩のところまでうまくいかないの…

（それは、あなたが男だからだよ。）

とにかく、今日こそは、素敵な殿方をGETするわ！！

待っててね

未来の旦那様！！

「おい！見てみるよ！あれって浦沢の制服じゃねえ？」

「マジで？ってか、ちょー可愛いんだけど？あの子！」

フツ…私のタイプじゃないけど、そう言われると、嬉しいわね。

「ねえねえ、彼女？一人？」

（女の子と勘違いしています）

「俺たちと遊ばない？」

「ごめんなさい…私急いでますの」

「いいじゃん？遊ぼうよ？」

「放して下さい…！」

ちよつと、しつこいわね?! タイプでもないのに、人の体にベタベタ触りやがって…! いっちょ、締めてやるか?

（我を忘れて、男の子に戻っています）

「ちよつと、てめえらしつけなんだよ? いいかげんに  
「おい? てめえら、何やってんだ?」

えっ…?

「男二人が、女一人に寄ってたかって何やってやがる?」

格好いい!! 何て素敵な殿方なの?!  
ストライクゾーンど真ん中だわ!!

「なんだてめえは?」

「お、おい！あいつもしかして…？！」

「俺が誰だって？教えてやるよ？世界最強の男！間宮健児様だよ！」

マミヤケンジ…名前も素敵…

「おい！やべーよ！こいつすげえ強いらしいぜ？！」

「はっ！んなのはったりだよ！間宮の名を語ってるだけだっ…！」

「ばか！ちげーよ！確かに本人だって！見てみるよ？あの制服、あれ、青嵐のだぜ？」

青嵐？お兄様の学校だわ…

「マジで？」

「マジで…！」

「じゃあ、ピンチ？」

「かなりピンチ…！」

「おい！話は終わったか？」

「「すみませんでした！間宮様とは、つゆ知らず、ご無礼お許し下さい…！」」

ニコッ

「「ニコッ」」

「今、ムシャクシャしてるんだ。黙って殴らせろ!!」

「「ええー!!」」

「つい訳で、死ね!!」

ボコッ!!

バキッ!!

ベキッ!!

何て、ワイルドな方なの…素敵。  
この方こそ、私の探し求めていた殿方だわ!!

「あゝすつきりした」

「あ、あの…」

「ん？あんだよ？」

「助けてくれてありがとございました！」

「別に？」

「あ、あのお礼を！お礼をさせて下さい！！」

ボディタッチ&amp;涙目&amp;上目使い！！  
これで、落ちない男はいないわ！！

「急いでるからいい。触んな」

な、私の攻撃が何一つ通用しない？！

「じゃあな！」

「あ、待って！私の殿方！！」

ピュー…

フフフ…面白い。

この私を見て落ちなかった男は、初めてだわ…

青嵐高校、マミヤケンジ

見てらっしゃい！必ず振り向かせて見せるわ！！

逃がさないわよ！オカマは、女以上に、諦めが悪いからね！！

絶対、旦那様にしてみせるんだから！！

ブルッ！

「どうしたんだい？」

「いや、寒気が…」

「へえ…珍しい。馬鹿は風邪引かないって言うのに。」

「あんだと?!」

「って、地味男君が言ってたよ」

「言っていないから!てめえ、ナルシスト!何言ってるだ!」

「殺す!」

「言っていないって!ちよつ…間宮様?!」

「死ね!」

「ぎゃあああ!」

終わり!

「って、終われるか!なんだ、この終わり方!」



## 第6話：優ちゃんと運命の出会い（後書き）

いつも、ありがとうございます。

いかがでしたか？

花木くんの弟、優ちゃん。

まさか、悪魔に惚れてしまうとは…

この続きは、本編で書きたいと思うので、楽しみにして下さいね

それでは、また（、、）

## 第7話：季春くんの日（前書き）

こんばんは

約半年ぶりの番外編更新です

今回の主役は、DS様こと岬季春くんのお話になっております。

もちろん、なっちゃんも登場してますんで読んでやって下さい、  
、

それでは、すたーと

## 第7話：季春くんの日

今日は、龍神高校に通うドがつくほどのS、通称ドS様で日々、親友(?)を虐め続けている岬季春くんの日を覗いてみよう。

『グッドモーニング！季春！！』

「グッドモーニング、サリィ。今日も美しい声だ。」

『もう、季春ったら…愛してるわ』

「俺も愛してるよ」

季春くんの朝は、只今お付き合い中の金髪美女サリィとのモーニングコールから始まる。それが終われば、シャワーを浴び、優雅に食事を取る。

例えばそれが遅刻ギリギリの時間帯でも気にすることはない。

ピンポーン！

おや？誰かが来たみたいだ…。しかし、季春くんは自分の時間を邪魔されたくないの、一向に出る気配はない。

ピンポーン！  
ピンポーン！  
ピピピピピピ…ピンポーン！

しかし、そんな季春くんの行動を予測していたのだろうか…？相手も負けじとチャイムを鳴らす。

「コラア！！季春！！居てんのは分かってんねんぞ！！さっさと開ける！！」

チャイムを仕切りに鳴らした相手は、季春くんの相棒…

「相棒ちやうわ！！気色悪いっ」ではない、ただのクラスメートの青葉夏輝くんでした。

「…何だよ？気持ち悪い…何で朝からお前が俺ん家に来てるんだ…？近所迷惑だろうが？警察呼ぶからな。」

「アホか！！俺かて来たくて来とんとちやうわ！！お前が、昨日の帰りに『明日の朝7時に俺の家に集合。遅れたらお前の恥ずかしい秘密を優ちゃんに暴露する』って言ったんやないか！！」

「……………ああ…」

「まさか、忘れてたんとちやうやろな！？」

「悪い、忘れてた。」

「はああ！？マジでム力つくんですけど…！？朝苦手な俺が…ただでさえ最近寒くて中々起きれなくなってるこの俺が…朝早く起きて全く学校と逆方向のお前の家に来てやったのに！！忘れてたて

…ま、まあええわ！！なっちゃんは心優しいからな！！それよか、  
なんの用事やねん！！しょうもない用事やったらシバキ回すからな  
！！」

（…何の用事だったんだ？）

季春くんは、これと言った用はなく、ただ単に夏輝くんをからかった  
みたいです。

まあ、こんな事は今に始まった訳ではなく月に2・3回のペースで  
あります。

「ハッ…まさか、用事っちゅーのも嘘か！？また、俺を騙したんか  
！？」

毎回、同じ手に引つかかる夏輝くん。  
季春くん曰わく夏輝くんのオツムは、プチトマトぐらいの大きさがし  
かないので、いつも面白いぐらいに引つかかってしまうのです。

「もっと大きいわ！？シバくぞ！！」

「と言うわけだから、別に用もないし帰れ。朝からお前の顔を見る  
のは不愉快だ。」

「言われんでも帰るわ、ボケッ！！お前なんか…」  
ポンポン！

「君、ちよつといいかな？」



夏輝くんが季春くんに負け犬の捨て台詞を吐こうとしたら、後ろから見知らぬおじさんに呼び止められました。

「なっ、誰やねん！？おっちゃん？」

「こういうモノだ、と言えば分かるかな？」

「け、警察！？何の用やねん！！」

「通報があつてね…君がいきなり押しかけてドア越しから大声をあげて困ってるってね」

「季春っ！！コラア：お

「その人連れて行って下さい！！俺、怖くて学校にも行けません！  
！」

季春くんは迫真の演技でお巡りさんに訴えました。

その結果：

「ちよっ、離せっ！！一体俺が何したって言うんやあ！！」

「ああーはいはい！！言い訳は、署で聞くから。」

「うわああああん（泣）」

夏輝くんは、お巡りさんに連れて行かれました。

「さて、朝一の夏輝イジメも終わったし学校に行く用意でもするか。

」

そう、彼は最初からこうなるように仕向けていたのです。流石は、  
ドS様ですね。

夏輝くんは、警察署で3時間程しぼられたそうです。

所変わって龍神高校。

季春くんが学校に着くのは、いつもお昼前です。

そんなだらけた季春くんの態度に担任の先生は、文句一つ言いません。いや、言えません。

理由は言えませんが、先生にも色々と言つことです。

「岬先輩!!」

「何?」

「あ、あたし…と付き合つて下さい!!」

季春くんは、夏輝くんと違って女の子にモテます。かなりモテます。

「悪いけど…俺、年下に興味ないから。」

季春くんは、女性のタイプは、年上の女性です。

「季春っ！！」

カッコ良く季春くんが去ろうとしていたら、何処からともなく夏輝くんがあらわれました。

「夏輝…遅かったな。何してたんだ？」

「お前がソレを言うんか！？つか、もうそれはどうでもええわ！思い出しただけで腸が煮えくり返りそうになるからな！！それよりもや…、」

「なんだよ？」

「何や今の断り方は！？一生懸命告白したこの子に失礼やろうが！？」

「本当の事を言ったまでだ。何が悪い？」

「かぁー！！これやから、クールボーイは！！」

「…？」

「ええか、よく聞けよ？巷では、やれツンデレや、やれ俺様が人気や言うけどな、いつの時代も男たるもの、女の子には常に優しくじえんとるめんにいかないかんねん。」

「gentlemanを平仮名で発音している時点でお前に紳士を語る資格はない」

「五月蠅いわ！！細かい事言っな！！」

「つまり、お前は何が言いたいんだ？」

「せやから、この子にもうちよつと優しく…」

「素敵！！」…そう素敵い！？」

「やっぱり岬先輩は、素敵です！！益々好きになりました！！」

「え！？なっ、何で？何処が？何処に好きになる要素がありまして！？」

「何処って、もちろんクールな所です！！」

「てか、青葉先輩、今時”じえんとるめん”は無いですよ。青葉先輩が言ったらお笑いにしか聞こえませんし（笑）」

「なっ、お、お笑いやて！？」

「なんか、気持ち悪いですよ（笑）？…あつと、いけない友達待たしてたんだっ！…そ、それじゃあ岬先輩！！」

「き、き、気持ち悪い…って…」

「ドンマイ（笑）」

「し、シバく…！お前を今からシバ

「季春く…ん…！今日もカツコイイ…！」

「あたしと付き合って!!」

「何言ってんの!!? あたしよ!!」

「悪いけど、ガキは嫌いだから。」

『きゃあ!! カッコイイ』



「…世の中、完全に間違ってる…」

そう呟いた夏輝くんの目には光モノがありました。

夕方、学校も終わり校門には季春くん待ちの女の子で溢れていましたが、手慣れた感じの季春くんは、その群れを押しつけて颯爽と去っていきます。

いつも（不本意で）一緒に夏輝くんの姿がありません。

夏輝くんは、さっき気持ち悪いと言われてシヨックで早退してしまいました。

そんな夏輝くんの事を季春くんが心配して…

（夏輝がいないと、イジめる奴が居ないからつまんねーな。）

いる訳もなく、そんな事を考えながら帰宅していました。

『よう…久しぶりだな』

どこからか見知らぬ高校生があらわれました。

「誰だ？」

『誰…？酷いねゝ覚えてないの？俺、この前、駅前でお前にボコボコにされたんですけどゝ』

「知らねえよ。ボコした相手いちいち覚えてないし。」

『言ってくれるねゝおい！！』

どうやら、喧嘩で季春くんに負けた子のようにです。

合図と共に、10人ぐらいの男の子達が季春くんを囲みました。

「はあ…」

「ここにいるやつらは、みんなお前に恨みがある奴だ。今から俺たちがお前をボコボコにする」

「その素敵な計画、俺も仲間に入れてくれや」

夏輝くんの登場です。

『っ…！』

「来るの遅いんだよ…バカ」

「それがせつかく来てやった俺に言う言葉か!?!」

「ああ…はいはい! アリガトウゴザイマス」

「心が籠もってへん!?!」

「うつぎ…」

「なんやと!?!」

『…おい、何俺らの事シカトしてんだ!?!』

『ぶつ殺すぞ!?! ああ…?』

「チツ…季春、お前の事は後や!! 仕方ないから、先にこいつら片づけるから待っとけ!」

季春くんの喧嘩なのに、いつの間にか夏輝くんが相手をするようになりしました。これも季春くんの策略です。

「よろしく」

『ふん! 偉そうに!! おい、やっちまえ!!』

「今日の俺は不機嫌MAXやから手加減でけんで!!」



「自分ら、手応え0やな。もつと頑張れや!」

流石は、龍神のNo.1。あつという間に喧嘩は終わってしまいました。

「ご苦労様、もう帰っていいよ」

「いいことあるか!？」

何処までも自分勝手な季春くんです。絶対にスタイルは変えません。

「そこになおれ!!お前は、ほんまに……」

（サリーの奴今頃何してるかな…）

「コリア！ちゃんと聞いてんのか！？」

「ああ？聞いてねえよ」

「聞けっ！！」

「夏輝……」

「な、なんや!?!」

「俺、帰ってサリーに電話しなきゃいけないから、もう帰るから」

「えっ!?!ちよつ、季春くん!?!」

「じゃあな。お前も早く帰れよ」



「サリ―って誰やねん!!」

いかがでしたか？龍神高校のドS様こと岬季春くんの1日は？

彼の1日は、夏輝イジメに始まり、夏輝イジメで終わるのです。

でもそれは、裏を返せば彼なりの愛情の表現なのでしょう。

彼が夏輝くんを認めているという。

今日、1日お付き合いいただきありがとうございました。

またの機会にお会いしましょう。

それでは

「そんな歪んだ愛情いるかつー！」

おわり

## 第7話：季春くんの日（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます

いかがでしたか？

夏輝イジメのお話は？

何気に季春くんの彼女も出てましたね。

金髪美人のサリー。

もちろん異国の方です。

季春くんが、付き合う人は大体異国の方です（笑）

そんなプチ情報入らないって？

本編の文化祭編を終わらせてから番外編と考えてたんですが、番外編の方が早く出来てしまったので先に載せちゃいました  
本編もなんとか頑張って更新したいと思います

それでは、皆さんさようなら、

## 第8話：エイプリルフールの夏輝くん（前書き）

どうも、久しぶりの更新です。170日も更新してなかったんですね。

さて、今回の番外編は、そのまんまエイプリルフルのお話です。

淒くクダラナイ話ではありますが、皆様読んでやって下さいませ。

それでは、スタート

## 第8話：エイプリルフールの夏輝くん

今日は、4月1日のエイプリルフール。一年に一度だけ、どんな嘘をついても許される日。しかし、如何なる理由があろうと嘘はいけない。よかれと思ってついた嘘が、時に誰かを傷つける事だってある。

このお話は、そんな思い掛けない嘘で、一人の哀れな少年が、病院送りにされるまでの軌跡を少しでもだけ描いたお話。

そう、事の始まりは、一人のドS様からだった。

am 11:00

「んー！！いい天気やな」嘘みたいに晴れた空やで」

空を見上げジジ臭くそう話すは、毎度お馴染み愛の戦士こと青葉夏輝くん。彼は、ドがつく程のSな彼の天敵1号（2号は間宮くん）の岬季春くんに呼び出されていた。

「しかし、季春の奴遅いな！人を呼び出しといて遅れてくるなんて、アイツには常識ってもんはないんか！ま、アイツにそんなもんあるなら、この世に戦争なんてもんは存在せえへんけどな。それぐらいアイツは、非人道的ってことや。」

一人で喋って、一人で納得する夏輝くんは、端から見れば不審者同然でした。そんな夏輝くんは、周りの人達が奇異な目で自分を見ているなんて思いもせず、今か今かと季春くんの到着を待ちました。それから1時間後、季春くんは悪びれた様子もなく夏輝くんの前に現れました。

「悪い、待った？」

「うっん、全然！俺も今来たところ…って、なんでやねん！！そんなん言うと思うなよ！！ハゲがつ！！何爽やかに登場してんねや？」  
「待った？」って、待ってるに決まってるやろうが！？お前が指定した待ち合わせ時間何時か言うてみい！！」

爽やかに登場した季春くんに憤慨した夏輝くんは、そう怒鳴りつけました。

「え？確か、10時30分じゃなかったか？」

「せや、ほな今何時や？」

「何時何時って、うるせーな…時計持ってるのかお前は？…12時だな。」

「その言葉をそのままそっくり返したらあ！！」

時計ぐらい持つてろよ、と、夏輝くんが悪態をつく季春くんは、夏輝くんの怒りは頂点に達しました。

「は？俺、ちゃんと持ってるし…ほら、ロレックス。」

「お前は、ほんまに嫌みな男やな？世界嫌み選手権があつたら間違  
いなく優勝やで。」

普通、高校生がそんなんつけるか？と、疑問視するぐらいに金ピカ  
に光り過ぎて、文字盤が見えない高級腕時計を、さり気なく見せる  
季春くんは、夏輝くんは違う意味で感心し、嫌みをねじ混ぜてそう  
言いました。

「男の嫉妬は醜いぜ？夏輝。」

「何でそうなるねん！！お前今の会話のどこにそんな要素があつた  
！？」

全くもって勘違いな季春くんの発言が更に夏輝くんをイラッとさせ  
ました。

「てかな、季春。お前、俺に１０時３０分に来いつてぬかしといて、  
何で１時間３０分も遅刻しとんねや！？ああ、！？返答次第じゃ、



お母さんはお前をシバきまわすからな？」

「お母さんって……やめろ、お前が、俺のお袋なんて考えたら反吐が出る。確かに、10時30分に来いと伝えたが、それはお前が来る時間であって、俺が来る時間じゃねえ。」

「んやとコラア！？俺かてお前の何十倍もの反吐が出るわ……てか、何言うてんの？自分、意味分からへんわ。」

季春くんの言っている事がさっぱり理解出来ない夏輝くんは、ちょっとかり季春くんの『反吐が出る』という言葉に、上乘せする事を忘れずに、そう尋ねました。

「俺は、更に何百倍の反吐を出す。意味が分からないって、俺の言ったことが理解出来ないお前は猿以下だな。いや、猿に失礼か……」

もう、『出る』ではなく『出す』と、半ばやけくそに、意外に負けず嫌いな季春くんが返し、夏輝くんのオツムの足り無さを嘆きました。

「殺すぞ！！こんガキヤ！！誰が猿以下や！！なっちゃんもつと賢い子や！！なんなら通知表見せたるで！！」

「いらん、体育以外2が並んでる通知表なんて面白くも何ともない。

「

「何で知ってんねん！？おま、お前…さては勝手に見よったな！？」

季春くんの言った、『体育以外2』発言が、凶星だった夏輝くんは、季春くんに詰め寄りました。

「見たんじゃねえよ。見えただ。誰が好き好んでお前の通知表なんて見るか、お前になんて微塵も興味ねえよ。死ね」

「ちよつと、そこまで言わんでええんちゃう？なつちゃんの心つて、結構打たれ弱いんやで？ガラスみたいに繊細なんやで？」

まるで、苦虫を潰したかのような表情でそう吐き捨てた季春くんに、ちよっぴり泣きそうになった夏輝くんでした。

「だから、俺が言ってるのは、お前がここに来る時間は確かに10時30分30分だが、俺がその時間にここへ来るとは、一言も言っていないって事。つまり、何時に来ようと俺の勝手。分かったか？馬鹿」

「な、なななな、何やねんソレ！？せやったら何で俺に10時30分って言うたんや！？お前が来る時間に呼べば良かったんちゃうんか！？4月言うても、まだ寒いねんぞ！？風邪でも引いたらどう責任とってくれんねや！？」

いけしゃあしゃあと、自分論理を語る季春くん、全くもって正しい論理で対抗する夏輝くんでした。

「馬鹿か？お前が俺と同じ時間に来たら何にも面白くねえだろうが？お前が寒空の中1時間30も俺を待ち続ける事にユーモラスが存在するんだろうが？少しは考える馬鹿。風邪？それこそ心配いらねーよ。お前は風邪なんて引かねーよ。なぜなら馬鹿だからだ。」

「もう殺す、今殺す。お前を、閻魔大王の所へ送り届けたる！！！」

DSが光る季春くんの発言に、夏輝くんの殺意は999上がりました。しかし、そんな夏輝くんには目もくれずに、季春くんは本来の要件を話し始めました。

「お前と無駄話をする時間は俺には無いから、さっさと本題に入ろ。さっきそこで花木優にあっただけど…」

「ああゝ！？お前、散々無駄話しとつて、よくもまあ…ん？優ちゃん？」

「そ、さっき来る途中にあっただけど…夏輝、お前に朗報だぜ。」

季春くんに憤慨していた夏輝くんでしたが、愛しの優ちゃんと聞いて、そんな事はどこへやらなりました。

「優ちゃんと何話したんや！？朗報って何！？」

「落ちて馬鹿…いいか、よく聞けよ？」

「あ、ああ…」

「花木優は…」

「優ちゃんは…」

「お前が…」

「俺が…？」

「死ぬほど…」

「し、死ぬほど…」

「好きだってよ。」

「嫌い…っつて、え？」

「嫌いじゃねえよ。好き。OK？」

「す、す、す、すきイ！？」

てつきり、死ぬほど嫌いと言われるもんだと身構えていた夏輝くん

は、それとは反対の答えが返ってきて、何を言っているのか直ぐには理解出来ませんでした。

「えっ！？ええ！！優ちゃんが俺を！？せやかて、間宮は？優ちゃん、間宮、えええ！？」

「間宮には、程々愛想が尽きたらしいぜ？まあそうだろうな、あんな扱いされちゃあな。それで、よくよく考えてみたら、お前の良さに気付いたんだってさ。良かったじゃねえか。両想い」

「お、おおきに！！苦節１７年愛を探し求めてやっとこさ出会えた！！長かった！！実に長かった！！」

「あ、そうだ。お前に告白したいと言ってたっけな。」

「こ、告白！？マジで！？どないしよう季春！？俺、どうしたらええん！？」

「馬鹿野郎、男が女に恥かかすんじゃねえよ。だからお前はモテないんだよ。さっさと彼女とこ行ってお前から告ってこい馬鹿。」

季春くんからのやけに気の利いたアドバイスに、成る程、と、納得した夏輝くんは、愛しい愛しい優ちゃんの元へと駆け出したのだった。

「やっぱりアイツは馬鹿だな。今日が何の日か気付きもしねえ。嘘に決まってるだろ。」

夏輝くんの後ろ姿を見送りながら、季春くんが満面の微笑みを浮かべてそう吐き捨てた。

そんな事とはつゆ知らずな夏輝くんが、この後、同じくつゆ知らずの優ちゃんに、ボコボコにされ病院送りになるのは、目に見えていたのは必至でしたとさ。

終  
わ  
り



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8134d/>

---

間宮くんと災難日記 番外編

2010年10月9日15時04分発行